

小児へのコロナワクチン

丁寧に説明 希望確認を／接種後も予防対策継続

砥部町・小泉小児科 小泉 宗光

日本国内で5～11歳を対象に承認されている新型コロナウイルス感染症（以下COVID-19）の「小児用ワクチン」は現時点では米ファイザー製のみです。

海外では、同ワクチンの発症予防効果は当初90%以上と報告されていましたが、流行株がオミクロン株に変わって以降、51%と低下しています。入院予防効果に関しては74%とされています（2022年1月）。このようにオミクロン株に対する発症予防効果は時間経過とともに低下するため、ワクチン接種後も引き続き感染予防の対策を継続する必要があります。

昨年末までは、日本国内でCOVID-19は小児の感染率が低く、同年代人口の1～2%にとどまると言われていました。一方、今年1月以降のオミクロン株の流行に伴い、小児の感染者数は増加しており、厚生労働省の公表資料によると、少なくとも10歳未満は6.7%、10代は6.3%が新規に感染したことになります。

デルタ株流行期に比べ中等症、重症の占める割合は低くなっていますが、感染者が増えたことでグループ症候群（喉の奥が腫れて呼吸困難などの症状を起こしている状態）、肺炎、けいれん、嘔吐（おうと）・脱水などの中等症や重症例の数が増えています。

国内の小児における症状を流行株の違いで分けた場合に、オミクロン株流行期における患者は発熱の頻度が高く、熱性けいれんの報告数が多いことが確認されています。2歳未満と基礎疾患のある小児患者では重症化すると言われていています。特に心奇形などの心臓病、高血圧、糖尿病、脂質異常症、慢性腎臓病、免疫抑制状態、がん、肥満度20%以上の肥満、コントロール不良のぜんそくーなどの小児には、ワクチン接種が推奨されています。ちなみに妊婦も重症化しやすいと言われていています。

「小児用ワクチン」の副反応については、12歳以上用のワクチンと比べると頻度は低いながら接種部位の痛みや発熱、全身倦怠（けんたい）感などがあり、まれにアナフィラキシーや心筋炎の報告もあります。

ワクチン接種を受けるかどうかは、一般論だけではなく家族の状況や行動予定に応じて、メリットとデメリットをてんびんにかけて判断することになります。その際、子どもにも丁寧に説明し希望を確認してみましましょう。判断がつかない場合は、かかりつけ医のアドバイスも参考にされると良いでしょう。

愛媛新聞「健康ファイル」

令和4年7月18日(月)掲載